平成25年度研究協議会資料　≪ 平成25年度教育課程研究指定校事業 ≫

都道府県・指定都市番号	５３	都道府県・指定都市名	横浜市
学校名（がっこうめい）	横浜市立神奈川小学校（よこはましりつかながわしょうがっこう）　（４９９名）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地　：　神奈川県横浜市神奈川区東神奈川２－３５－１
電話番号：　０４５－４４１－５６５６
メールアドレス　　：ha01-miyata@city.yokohama.jp
学校のホームページの URL：y3kanagawa@edu.city.yokohama.jp

【研究成果のポイント】

○研究課題番号　　:2小学校

○研究対象教科等　：家庭科

○研究のキーワード：家庭生活と家族　ガイダンス　自分の成長の自覚　家庭との連携

○研究成果のポイント:　家族とのつながりや自分の成長を自覚し､進んで実践していこ　うとする態度を育成するためには、第五学年の最初に行うガイダンスにおいて、自分の　成長を意識させながら学習に取り組むためのねらいをもたせることが大切である。

「A　家庭生活と家族」の内容は、他の内容と関連させて年間指導計画を作成し、題材　構成を工夫することや、「家庭生活を見つめる、問題解決する、生活に生かす」の学習　過程を工夫して学び合うことにより、学んだことを活用して家族の一員としてよりよく　生活していこうとする実践力を育むことができる。

【研究の目的､研究内容】

（１）研究主題

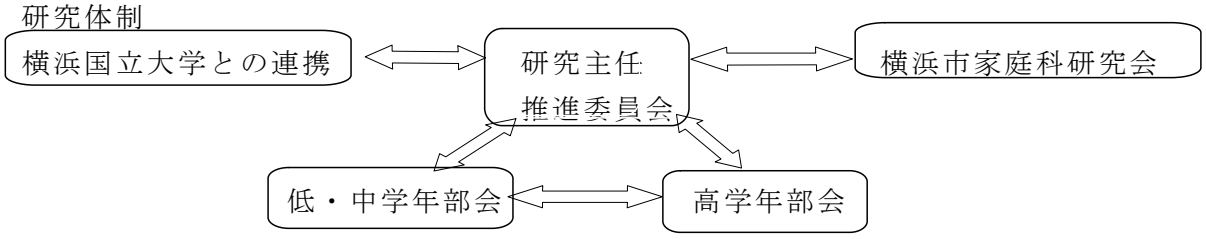
> 自らの課題をもち、共に追究し発信していく子どもの育成
> ～家族とのつながりや自分の成長を自覚し、実践力につなげていく家庭科学習～

（２）研究主題設定の理由

本校は、古くは神奈川宿として、近年は京浜工業地帯の中心として発展してきた街にあり､創立１３８年を迎える。現在､工場の跡地には高層集合住宅ができ､そこから通学し　てくる児童が多くを占めている。また、共働き家庭も多い。児童が家庭の仕事を担当して　いる割合は低く、家庭科で学習したことを家庭で実践することも少ない。児童の家庭生活　や家族への関心が低く、技能の定着が難しい状況である。このため、保護者の家庭科学習　への関心や理解を高める必要がある。

そこで､内容「A　家庭生活と家族」の内容と他の内容との関連を図った題材を構成し､家庭と連携を図り､家族の一員としてできることを増やしたり､家族とのつながりや自分　の成長を自覚できるようにしたりすることによって、家庭生活に進んでかかわろうとする　実践的な態度を育みたいと考えた。

（３）研究体制



（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	４月　　年間指導計画、研究のねらいと方法の確認
	４月17日　「ガイダンス」の授業研究（第５学年）、今年度の研究のねらいと方法
	７月18日　「お弁当を考えよう」の授業研究（第６学年）
	「家庭の仕事と家族」の授業研究（第５学年）
	９月９日　「夏休みの実践報告会をしよう」の授業研究（第５学年）
	11月４・20日「住まい方」の授業研究　（横浜市家庭科研究会との共同研究）
	11月22日　指導を仰ぐ会（家庭科、生活科、社会科）（横浜国立大学教授指導）
	12月～　　研究のまとめ

（５）具体的な研究内容・方法、研究を進める上での工夫点等

○　実践的な態度を育成する２年間の指導計画の工夫

・「A 家庭生活と家族」の内容を他の内容と関連させ題材構成を工夫する。　・

・A（１）アの自分の成長と家族について第５学年のガイダンス授業の在り方を探る。

・第５学年の最初と最後、第６学年の最初と最後に位置付け、学習の見通しをもたせ、自分の成長を振り返ることができるように年間計画に位置付ける。

○　自分の成長と役割を実感させる指導の工夫

・「家庭生活を見つめる、問題解決する、生活に生かす」の学習過程を工夫する。

・実生活に結びついた問題解決的な学習と言語活動の充実により、思考力や判断力、表現力を育むことにより自分の成長を実感できるようにする。

○　個に応じた指導と評価の工夫

・家庭科専科教諭と学級担任とのティームティーチングによる指導を工夫する。

・一人一人の児童に応じた支援ときめ細かい評価により、学習の充実感をもたせる。

○　家庭との連携

・家庭科だよりを配布したり、保護者ボランティアの活用をしたりする。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果と課題

○　第五学年の最初にガイダンスの中で２年間の学習の見直しをもたせることができた。

○　学んだ知識や技能を活用し問題解決する力など、題材で身に付けさせたい力を明確にすることにより、計画的に実践力を育成することができた。

○　ティームティーチングにより、個に応じた指導と評価を充実させることができ、自分の成長を自覚したり、役立ち観や自己有用感を実感したりすることができた。

○　家庭科だよりの配布により、家庭実践の協力を促すことにより、積極的に児童が家庭実践に取組むことができるようになった。

○　保護者の意識も変わってきたが、さらに家庭科学習への関心を高める必要がある。

（２）研究成果の意義

研究を進める中で、家庭科学習に対する保護者の意識が変化し、児童の家庭生活や家族への関心が高まった。児童は、家族の一員であることの自覚をもち、家庭の仕事に取り組む様になり、家族も児童の成長を感じることができた。

（３）指定期間期間終了後の取組

横浜市小学校家庭科研究会の研究日程に、本校の研究について公表して行きたい。

第５学年､第６学年の２年間を通して家庭科指導の成果を見ていく必要があることから、次年度も研究を継続していきたい。